

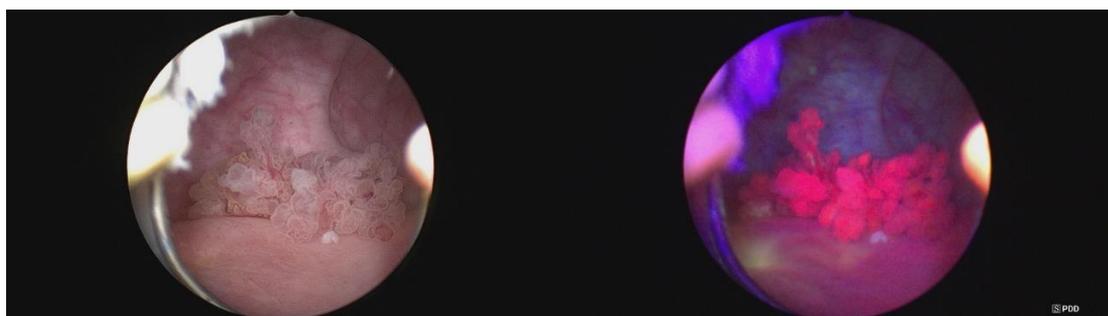
光線力学診断を使用した表在性膀胱癌の治療：

表在性膀胱癌に対する、光線力学診断 (PDD) システム OPAL1® (STORZ 社) システムを使用した内視鏡治療。

表在性膀胱癌の再発率は 60~80%とされており、他の癌腫と比較しても非常に高いことがわかっています。そのため膀胱癌はその後の進行を防ぐためにも確実に病巣を切除する必要があります。

光線力学診断では 5-アミノレブリン酸 (5-ALA) を術前に内服する必要がありますが、内服後 3 時間ほどで専用システムを使用して膀胱内を観察すると腫瘍が蛍光色にはっきりと認識できるようになり、手術時の腫瘍の見落としを防ぎ、再発率低下に寄与すると期待されています。(腫瘍検出の原理は、ヘム合成における腫瘍細胞の代謝活性の変化に基づいています。5-アミノレブリン酸 (5-ALA) が体内に取り込まれると、正常細胞ではヘムに代謝されますが、癌細胞ではその中間産物であるプロトポルフィリン IX (PpIX) という物質に蓄積されます。この PpIX に青色励起光を照射すると、赤色に蛍光を発するため、正常細胞との区別が付き易くなり、微小な がん細胞の見落としを軽減します。)

この診断システムで恩恵を受ける患者様に対してはご相談の上必要と考えられる方に使用させていただく予定ですので、担当の主治医の先生にご相談ください。



上図 当院での使用例、見え方は多少毎回異なりますが腫瘍は赤く発色し腫瘍の見逃しを防ぎます。